

各人権条約に基づく個人通報制度の早期導入及びパリ原則 に準拠した政府から独立した国内人権機関の設置を求める総会決議

当弁護士会は、わが国における人権保障を推進し、国際人権基準の実施を確保するため、2008年の国際人権（自由権）規約委員会の総括所見をはじめとする各条約機関からの相次ぐ勧告をふまえ、国際人権（自由権）規約をはじめとした各人権条約に定める個人通報制度の導入及び国連の「国内人権機関の地位に関する原則（パリ原則）」に合致した、真に政府から独立した国内人権機関の設置を政府及び国会に対して強く求める。

【提案の理由】

1 個人通報制度について

個人通報制度とは、各人権条約の人権保障条項に規定された人権が侵害されているにも拘わらず、国内での法的手続を尽くしてもなお人権救済が実現しない場合、被害者個人等が各人権条約上の機関（委員会）に通報し、その委員会の「見解（Views）」を求めて条約上の権利救済を図ろうとする制度である。

この個人通報制度は、国際人権（自由権）規約、女性差別撤廃条約においては条約本体とは別の選択議定書に定められており、人種差別撤廃条約、拷問等禁止条約においては条約本体の中に受諾条項が定められている。従って、個人通報制度を実現するためには、各条約の人権保障条項について個人通報制度を定めている選択議定書を批准し、または条約本体上の個人通報制度を受諾することが必要であるが、わが国は未だに批准または受諾宣言を行なわない。

ところで、残念ながら、日本の裁判所は、国際人権保障条項の適用について積極的とはいえず、しかも、刑事訴訟法・民事訴訟法の定める上告の理由において、国際条約違反が含まれず、国際人権基準の国内実施が極めて不十分な運用となっている。

そのため、各人権条約における人権保障を実現する個人通報制度が日本で実現すれば、被害者個人が各人権条約上の委員会に見解・勧告等を直接求めることが可能となり、そうなれば、日本の裁判所も国際的な条約解釈に目を向けざるを得ず、その結果として、日本における国際人権保障水準が国際基準にまで前進し、また憲法の人権条項の解釈が前進するなどの著しい向上が期待される。

2 国内人権機関の設置について

国連決議及び人権諸条約機関は、国際人権条約及び憲法などで保障される人権が侵害され、その回復が求められる場合には、司法手続よりも簡便で迅

速な救済を図ることができる国内人権機関を設置するよう求めており、多数の国が既にこれを設けている。

国内人権機関を設置する場合、1993年12月の国連総会決議「国内人権機関の地位に関する原則」（いわゆる「パリ原則」）に沿ったものである必要がある。具体的には、法律に基づいて設置されること、権限行使の独立性が保障されていること、委員及び職員の人事並びに財政等においても独立性を保障されていること、調査権限及び政策提言機能を持つことが必要とされている。

日本に対しては、国連人権理事会、人権高等弁務官等の国連人権諸機関や人権諸条約機関の各政府報告書審査の際に、早期にパリ原則に合致した国内人権機関を設置すべきとの勧告がなされており、また、国内の人権NGOからも国内人権機関設置の要望が高まっている。

現在、わが国には法務省人権擁護局の人権擁護委員制度があるが、独立性等の点からも極めて不十分な制度である。

このような状況の中で、日本弁護士連合会は、2008年11月18日、パリ原則を基準とした「日弁連の提案する国内人権機関の制度要綱」を発表した。

さらに、2010年6月22日には、法務省政務三役が「新たな人権救済機関の設置に関する中間報告」において、パリ原則に則った国内人権機関の設置に向けた検討を発表するなど、国内人権機関設置に向けた機運は高まってきている。

- 3 当弁護士会は、わが国における人権保障を推進し、また国際人権基準を日本において完全実施するための人権保障システムを確立するため、国際人権（自由権）規約をはじめとした各人権条約に定める個人通報制度を一日も早く採用し、パリ原則に合致した真に政府から独立した国内人権機関をすみやかに設置することを政府及び国会に対して強く求めるものである。

以上のとおり決議する。

2011年(平成23年)3月15日
兵庫県弁護士会